漢
懷思記
三
274
3

留口門
號 274
卷 3

明治三十一年十一月五日
内藤氏寄贈

東京大久保餘田百樹貴番地
内藤雄藏

東京帝國大學



一 今の世にいとさかるる者聖人の道
二 ほのぼのと明らむ前のほとり海馬小路
三 墨墨の色服上人の
四 学徒大ぜいのハ僧法師まあるといふ
五 学徒ある人ハ聞果報を小あるる
一 家弘が知のる者要平仲が交のる
二 花見弼と法元仏が酒ぐりのる
三 有馬侯ゝ云人皮ゝらの病と看病をする
四 徐衡と孔衡と和歌乃交といふ者しる
五 人のゝと面とハ似るハ面と云る
大義とちひうの法恵

一 接の手分梅の某并憑物のす
二 周乃文まのす
三 教教ものを数さまてく憑恐ありしす
四 韓信命ふおて人の膀をとらるしす
五 千秋乃ぬうといふす
六 司馬相如乃界化格ふ半つけしす
七 後漢乃陳蕃ぐうす
八 江美判官自害をしす
九 近腹ちりふ和めのす付泰の穆云のす
十 泰の始皇を孫山ふ葬しす
十一 近腹ちりふ宏義ふ沈て忠義ふあしさるす
十二 ふ除ちりさりの大接ちるふハ像ちるとふす

憑恐記事之文

法師の憑恐

傍ちりしハ世をいとひくく人をとらもくとりけく賞
とく業わ恐辱をとりつく衣とし法師をりつく
産ちしられふよりくちりを見のりをとらるさて
りりくの記事と変ちとうのふ大敬ありく彩
とくりあり付ハ法師乃あらひふ業しある
付ハ引敬の和をふ和ぐ見ものを大空刑宝の
ちひちくをしぐし 僧師ふ沈て又拍ちりくく
いちしん法華をつぬし むりく法師乃業同を
かくぬいちんや学法ちさ法師ハ聴拍のむくひ法り
ちしたく年るとりて像をとくのちん

一今の世のはうさ[illegible]めさの有鶴殿と人のの
さるの人乃いとく今の世のはうさんそのさう
よ奥刃の関係用懐の向れ程の河持をか相系并
上なくいとの数ようりあるの中の大孫小孫麿
[illegible]生傷こまりくのあるる今ハありとをさうに
としよあるとこと人ていとく古しへ智恵名誉の
学人ありくるなぐ今ハさくまさる学ふのつり
のあるさ有世さかされるぞゆくしさ数法花
乃世間小鶴殿上人とて左ときさ僧のれりる
と知らぬさかぎりあるやまひさ門とを向く
法法うんとをきこしめしうふハ
戒師とをたのこ扱りしめしと義とく法華経

ありしふ上人さたこそて迷化ひとまこうり
院ひるけさ法うこれかりくこ三ゆの場ふ武義
のふ小相ふ[illegible]牧ようるをとりて院ふ
海のこ弱こりうりげ乃ひこかあくれ
さ文ありられハ鶴殿とをうけくはて
あひあのるふ仏日と孫てはふ院の出義ふ
はるハ鶴殿上人まて院の法華をうけこりられ
ハるふありて鶴ゞまふとぞ乃くこ年
久くありてはるたとをきりしかや

二 河内国弓部の法師ふ小ふるあう
そ乃うん婚のもの法の僧河内乃国平瀬の里う
宿かりてこ海里ぬあるゞいさりて来

の松山に義せて稲さ勢ありこの信濃国小
諸重信者てかの信濃の松蔵国
みなもとの光うち給ふ蔵乃おとあけ
ところに武馬人のおとくのいて出屋くと
ひうけつかりうたはそれとりてあげ
給ふとを報生みてハ儀くして西ハ給ふし
我ハ出ちさあうとを弓削といふ法師
法師すりーが武家の恵あつ四りをを
施物とうへさべさ智恵すめくりうく馬ふ
つて年ごの恵と西ー今の方言海く
荷物と蔵てその結賀とりて乃家儀を
のひちさを也らまりてそのありこ海を見



めへといふふうに信ちうくあそうくて
らまりぬ兼あけくかりるとあ言まく
はうつゆめべふ家にうきそのまくたを
うり信ふく蔵ーまう料をさんげーりを
りんこふれとうひまくまし給べつまを

三　公三郎の義脱と人のす

仁和の月六年扶ふハ天物兵乃ありつまりく天下
とみさきんすと信飛ーりりふ公三郎乃貢金又
ずーーのふ伝飛ーて名字利貴乃信ふ
ありて武家よりてをやさせこまくよう
紙とれくさべーーいひりりを形まー性て
それのり公三郎ふ武ことりこ家ようめせ

どもあさでつ事ゆるしたまひけり高原
上人これをうけ
四 学徳大也ときの僧法師ゆゑにいかに
をとこ仏乃ゆへ我ひとり仏乃をあとうと
ぞ心ゑ生れやくの大也ゆゑさとばあさの苦
行をりしとをとめるゆゑに俗りんや家身
これ生死のやみをてらすたゞ俗徳とむ
さりるこう着他乃一餐と食られべわゞ十賓と
うんさしらひ又他乃一盃の肉とうへをわり十
作れ肉とうんさしらひ人つ人の徳物へ人のあり
うりを仏を学徳もうてとりてむやうへ
地ごくの苦をけゆるべきこうこゞひゆゑ

徳ゆきと学徳あるとくゆゑ人ゆゑ勢て行とこ
そうにんとろうなり俗とは南山の大師へ学れ
紙とて夏をとりこゆ浄人をりとその法ひを俗
又法樂徳ゆはゆ身家う職ゆゑ世を渡つ身
とるこうゆゑ法をりく樂をそりて殘物を
むさりる仏是高ゆゑ
うをくして大也乃ひゆゑ人ゆ仏法をを
ゆるを人ををきゆぬりのへ海とり仏者ゆ俗法
所とのゆりのゆはあゞ光居士とゆりゆり
とをきを法人つ
天 学徳ある人へ国墨撥五ゆ蔵ゆ
又学徳のある人をりゆまゝ墨をうてゆ

ハ雁性りと発すり何そむくりんとい人ハ格言国
果のたあ〜ぶや発乃乃理ハ〜つるそハ佛と
爺とあ〜べんとたれ甘雪隠をべしてく人
ハ毒くなるのろく〜く実ふハ高金〜人ぬゆ人ハ池こ
くの揺ゆとあり佛ハとやふ所ハ乃あり
ようくとひたうべし雁果りこと意あ〜ばなど
ハ〜てつ〜あやがんあ〜そ〜ぶひとてつこ
とハとよさ毎ハく意ハ生ハそく移そんとそ
ぶ所ハ師りすし だんるの拙と佛の乳ハ移こ意
の慳貪とやふ所ハ義あり人の慳貪とハやふり
て佛ハ師乃慳貪ハ〜ふるり佛人ふあんふり
ハ乳ハとまくむるりハ義ハするふをいまりむる



佛ふハ義といまり〜乳ハとく佛の義ふる所ハ
ふまぐ意ふり人ハ〜ふ所とんとたり〜ふり
とこのほとハ方の堀ふとてハ内ふりちあ〜意
りろくの義ふちハ内めくこ意と跳つ出〜意こと
すありちこ意ハ乳ハ佛ふるとふ〜ひこの人ハ
うんハふく堪意してハとつしこ佛乳を拙そ
意大義ハとをハ内ふてふとこハ〜

友たち愛りの堪恵

意こふまりろ〜ぶ友ハちハ学ふこのむ人ち義
ある人義理ハよくふ部ある人正意なる人金
ハあり人とそのそのれ人ハまりりハ論勉ふる
ひとをれハ内ろ意ふ意意意意意意意意意意意意

[illegible]れてくるしくなるまでしてあるべき
らばちやうあるべしいひやぶ[illegible]されば来久し
くむろひく[illegible]ひのふめ[illegible]くあり西[illegible]子
乃まづりハ涙こと水のこと[illegible]の人[illegible]あるハ
別してあちらひ[illegible]ハ[illegible]人さへ[illegible]
[illegible]さ人のまづりとものことしとい[illegible]
下[illegible]乃まづりよハ約束をさしあ人今[illegible]
三度あひてハたやすの年をうれしうあうう
[illegible]といてされこうくまはいといひ
[illegible]めのこ[illegible]ふたゞひてゞせようくせよう
[illegible]れうるハあふまたこれをあを服[illegible]
[illegible]くあにしあ中たらよるまるをいれふ人

乃まづりハ[illegible]こと[illegible]のこうとい[illegible]
いもで[illegible]ものあまさ[illegible]ふ。[illegible]人の[illegible]
ものもの人乃まづりふたと人らを[illegible]人を
一 [illegible]対[illegible]平仲が[illegible]れ
[illegible]ふ[illegible]人[illegible]ふ[illegible]相[illegible]ふ[illegible]
いこふまてつあふ[illegible]のこあふんとい[illegible]人の
まづりをつひふ[illegible]こ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]おりまで[illegible]
あふまづ[illegible]こと也[illegible]平仲とい[illegible]人い[illegible]
まづりとよくもふ[illegible]人[illegible]れて久[illegible]
[illegible]ぐ[illegible]りを[illegible]ぐりを久[illegible]
[illegible]と[illegible]ふ[illegible]ひさり。[illegible]ふ人

指爽のあふきうの歌ふうきう人濫觴ちうちんふ
へ門ちうり立のさてまづいろべうべとどとあり
まとの友よ陶じりろにい侘ありていりちう
うさと賞一ちん

二　花巨鄧と法元伯うまづちうの夕

りあとうの花巨鄧と法元伯と友ちうまて
ちうしうをむうひしふ花巨鄧ちうとのあり。
そうは法元のうあうりは秋のいりうの人うあべ
を自ありてうとうあべしく紡乗しうり秋ふう
望て紡乗しうりはいうつとうれい法元伯ふ
ひうりとうとうし食をしらへておるうり。毎うう
いうくうれうより知まづは千里のううり今自



うあうしびちうとうれしうとを知りつうあうしと
ひへまうしふ法元伯ひうのやとよまうとあうう濫美
うあのこうきびいりうりあうしとひへ
乗のこうく花巨鄧ちうるふのうまて毎つま素ふ
ちうり。毎大きふ変して我ちの友ちうふ
ようちうへうまうぞひけう。その紡乗とたづへ
ちうるうりくのごとしそのあふい者ちうを
みてちうちうは陶うりてちうとうつちうとは
実の皮ふあうしび。三の虎うにはたちうしう
ちうび毎ふの刀そあうそきあうとひうしうり
いひつうへうしうとひううび人をバ要ちうう。ふと
うちうへ勢は毎紡くうう雅蕭あんぞちうく

ちゝをとこ、いとをしがりて、ものをこしらへ、
ゐづくるあひだ、それいとかひとりつくまじ
きものなれば、いとさびしくて、ぜんぜうをもて
すつくまじきもののいひけるあひだ、中
ごろのことにこれらはまことの者にあらず
三　前長伯と云人、皮膚の病と着病をして
番乃前長伯といふ人、後世を思ふ心のあ
りけるとこゝろざしをおこして、
あるとき、ものぐるをこしたる者、
後世を思ふ心ぞ、着病をしたるかゝる
後世を乱あり。軍兵あつまりて、ふせぎたりけれ
ばものぐるをみるあげくをきて、病人ひとり
をとゝりてとゝりて前長伯ゐる乃皮膚をとりて



ぬいてゐるうちに、軍兵
まりくるものをみてばとられぬ者
みるあげくをきてばとられぬ者
ぬぎてゐるうちに、前長伯ゐる乃皮
のをんなりこれ皮をぬいてくれ、後世
まつるとふ病ふけりとをきてくるぐる
いたるふあしび病人をいとをしがりて、
くハ我をこゝにしてはぬ皮をとりてゐ
皮とらをもふいひなきハはちりの大きふ
てその家をとりけるとぞ。あやうきふのそ
て奥りとをきてうまごさよ皮をとる大
うきはいわをれどくいつゝあり。久しく

ちぎりし友だちハ大事の時にもぬかれう
ちゝおやとは堪忍してまじはるべし也
まじはりハかりそめ一端のうらみハうちわすれず
おもき事ハ大かたかくの通理也

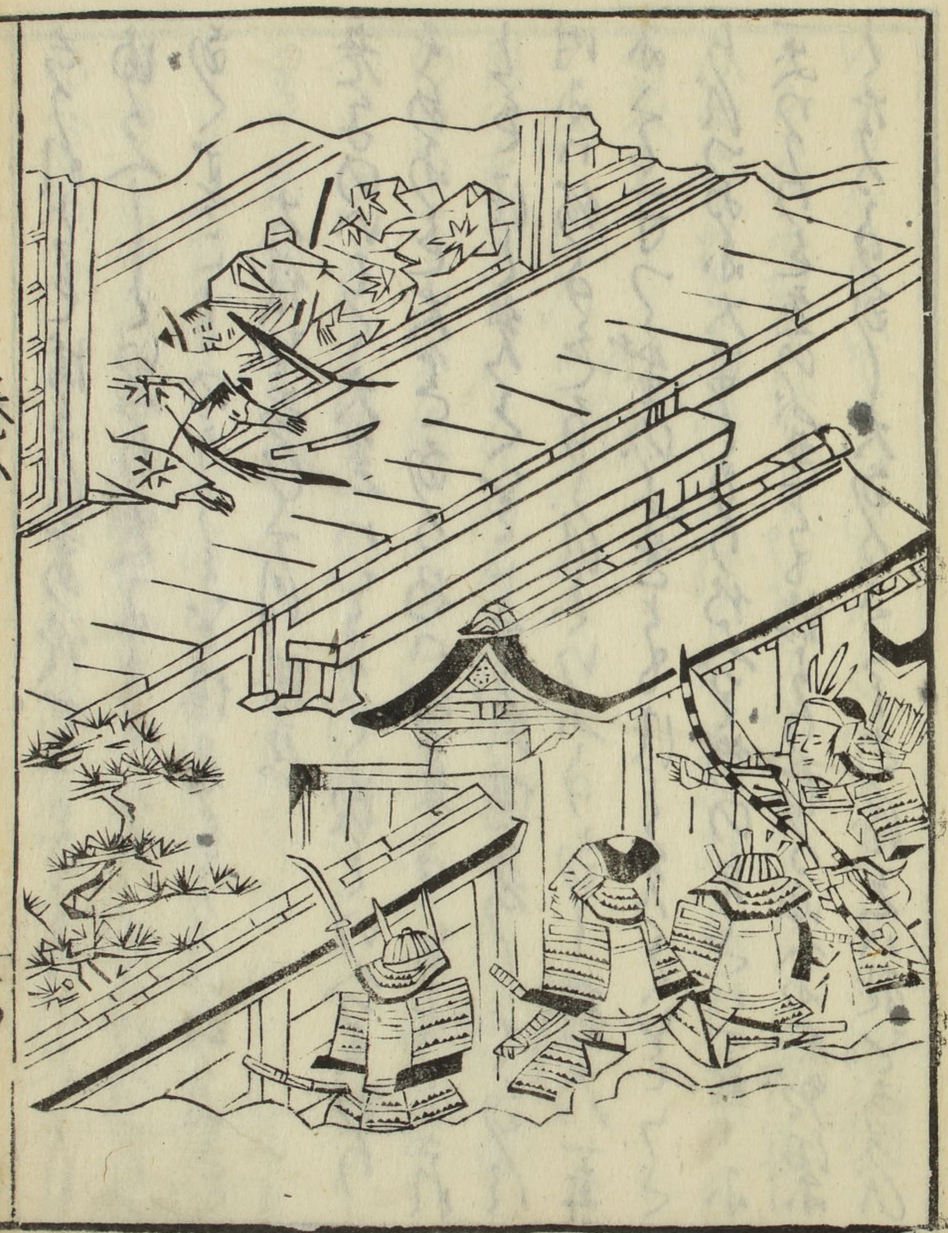
四　孫衡と孔融とハ如女の字をいひて物しよう

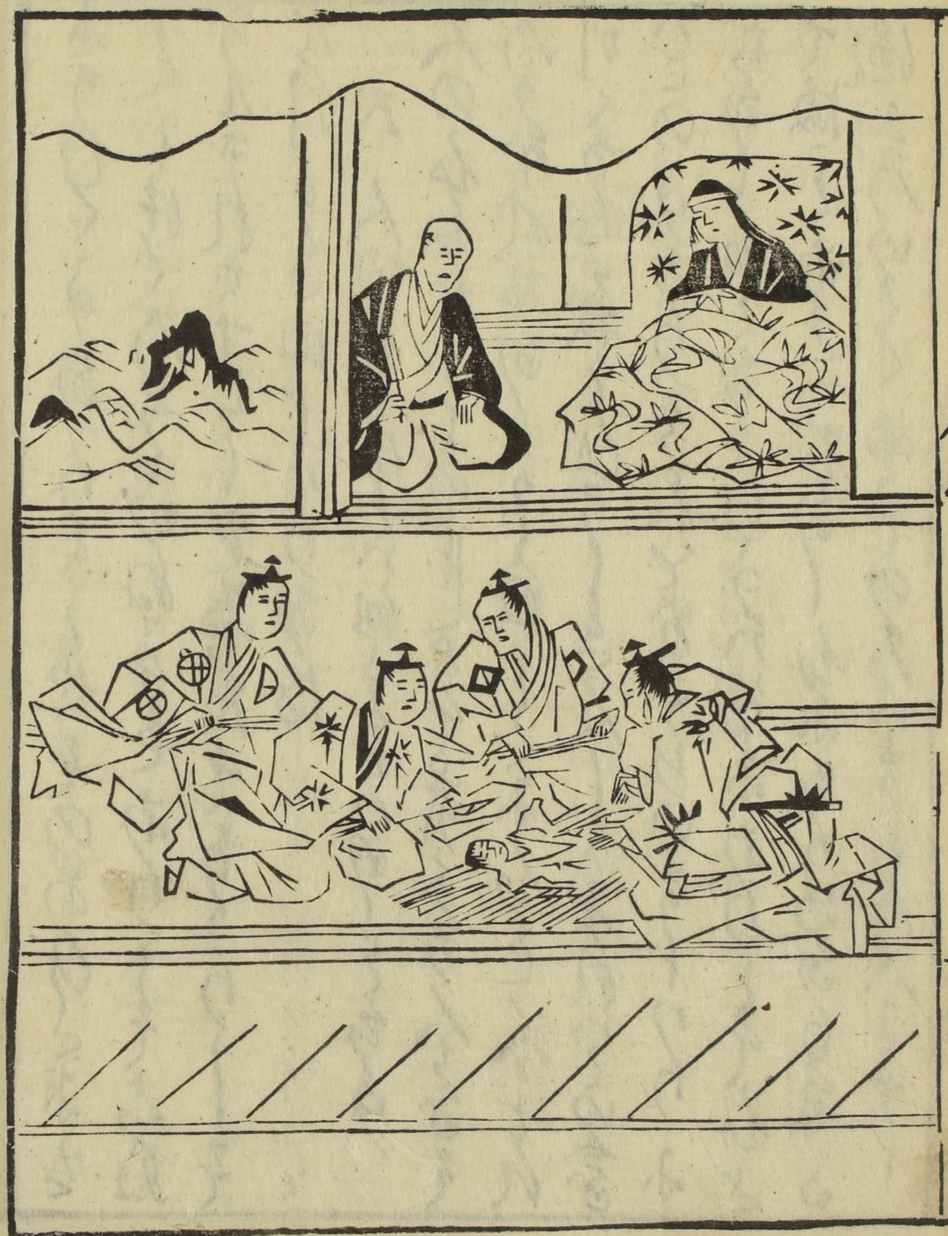
後漢の孫衡といふ人ハその年いまだ幼少なり
して学文の道にありき孔融といふ人ハ年
五十なりふして又かく道なき学者なり志
こゝろを交ちをて如女のまじはりをなす
といふことを月日にそてまなびしてよかりせよかく
いふ孫衡やもくちびるきりそのとしハ至極
のふちびひされたるし他めでたくして。たびひ



ふかくつゝしみなりきし也。その上ひとつふかき
すこし情なくのちにかねごとをありしそこぬ
ふされたすこしも違たてまつりしぞ
たいへんとさ誠じりなを

又人の心と面とハ似ざるものなしといへり
人の心をかりての上にこそ貴き方人をかそ
みかれ物あしくうちとけにくき人とかれ
別くすり秋とひとしき人しかれバとの字
ひとのかりけりぞれを友だちのまじはりに
なしかしむかしハ濫にありとぞんぐ
てかたくあまへハ物あしく然にかの物なりしぞる
遁去乃いまく歯との名ハまさとく入りてし





ちうれとも海さに家敷せさるをうりまち
海ろへしとていりかを安まりりそいろり
あくばきこしのうへと懐妊もちうにあるへさ

大儀とおひ子川懐妊

老子のいちく大宮ハとそくなしいへつ加り
そあめを大きこあのうあハ出来すをそくされ
とを法と紙くくとこへば懐妊してあく
附ハい何ものをうへば様乃三年
ハこ一すつ生のハすとも法くをとこ
らべつあハ大きくもの行人今物のそこハ一年ハ
一丈りりを五のびきとも治りれりゆくハや鬼梁
くなるものへ大あるくくあるハ花とうのび

いりりを喜びて身をひそめく附とまりあり潜殺ハ
とそ地ハかれてまむ殺の附と治るとく八威をる
ひ雲をれとりあをふ殺りて天ハあり命ぶをくく
為べし

二 関乃文主のくす

関の文主ハそのさ乃為を商作とそ戸けり殺の射主
の長下ニりて主面くいをえれしハ射主いり
てををとりくを為くとろうをの関をありりのハつく
り主て商作ハ射主くて食をし発ちり商作られを合
りりといハわゴをの関を合りて主ゴくあをり
作人今を商作すりをうり殺りて行くを主をくし

の貴賤をいはず夢とかりの宿りとなん侯の
そむきそしるの余ふ文をのこしあるひ敵乃
世かりの武を國とたりちあひさゝられ命作乃堪ぬ
きの余ふ不ん思の民乃さあ哀れい大きかりんぞし
あ海ふあり

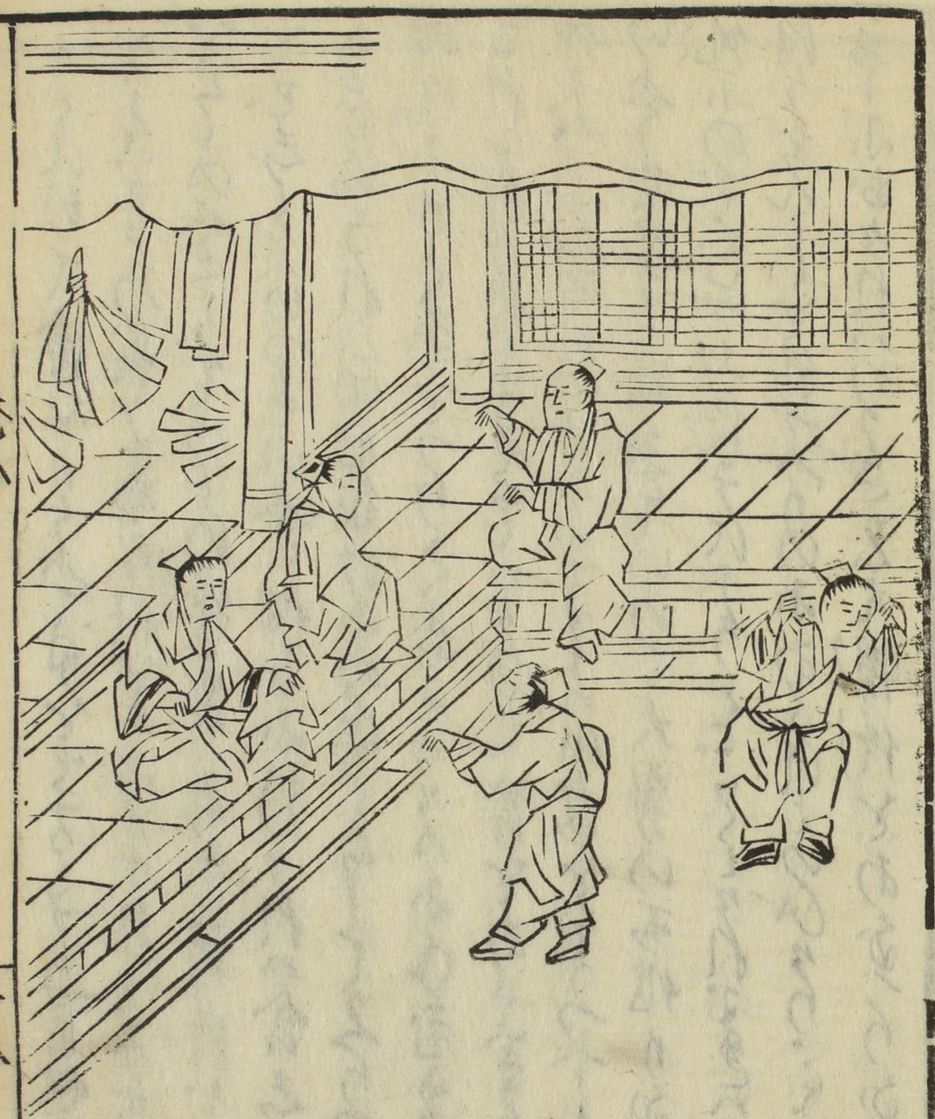
三　教訓わりうとうきて慈悲あり

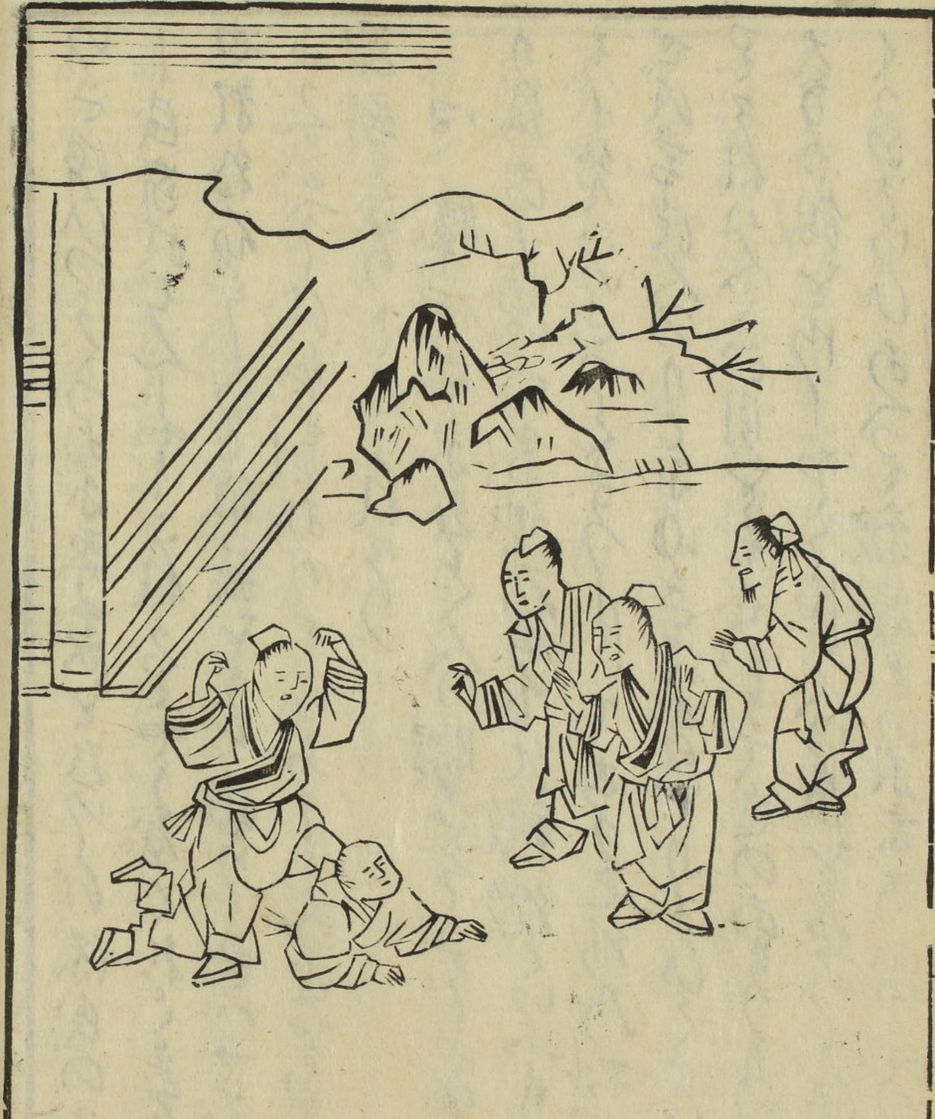
教の業のもけ教祖ハ永暦元年ふ俗豆のふ誕が
ふ俗ふうりされいりゆきしてと二度天下とうりひきき
源氏の敗とうりやとうりひて世の変とうぐひ給
ふ中ふ平家重盛の伝ふ俗養の祇親入道とふ
りの宗人乃むさぼあり中ふ対三乃むさぼ頼人乃
さらうくしうりふ海ふ教訓きのびて海ひきまふ

不男ふ人家まうり教訓大きひとうとび千鶴丸と
名づけくのしそぐてらきふ山ふ三ふ乃妻祇親
入道家うりゆりてオんつけきのゝせられ後ゞのぞと
うめう妻戸をふハあきて入道家の弟うし
のひけう出家ふいとやしゞ海むうりのくし
男して海ふけしうきて入道家をて男ハ
されぞとしふ世ふあり乃ゞられ人教の上けるく
とゝ入道家うり入道家ふ後ゝて源氏の残人ゞとゝ
ふうりて平家乃出ゞうあゝん付ゝけゞりんゝ
人をゆうゝぬむあめふりのそれとうひうく
女うりくふりのぬやう系うあうやて命ふ人ふうりを
て教乃のゝとうとうひうきゝ作の上海きあし

て伊豆乃松川のほとりに隠の水底に出まゐりの
らぬしつきんにこもりゐむとぞはやがてにかろ乃
小松殿ふかうりしてむとにまうりすぐれ頼ハ此うの
とを尊ひのぞみをとげさとなくりまりさげりまい祐親(すけちか)
入道とうさむと云ひ両びのうひにとひあくし
殊へ云ふ大夫をおもふて云ひ立てふにもすゝをが
ありそくわさうりうちうとをちくきむとうそ身をか
ろかし命をとしおかりゐもとろう身かきしあり
と云ひの家文小松も入道六波羅のきけとうらんと
ひしかど鬼きを隠かれ家(かいけ)をたのみて伊豆乃にふ
ふこもりゐするとこそ廿一年をすごし義兵(ぎへい)を
あげく八牧(やまき)の判官をうち其のひしより勢(ちから)くり

いさゝかひつくつねに平家をたいらげ源氏の代となる
しむかれたんじやうこれなるやう成くれくまうりと
也頼朝ハかく祐親をうち給ひ世ハふたゝび源氏
にかへるべしと智量(ちりやう)ありてかねて大器をみとめしの
君(きく)号(りく)もありしとはこれなり
○ 韓信(かんしん)作市(かんし)に出て人の胯(また)をくゞりし事
り給ふ漢(かん)の高祖(こうそ)乃臣下に韓信(かんしん)といふものあ
りしが若き時ハいさゝかくまつりして志つかも張乃正信(まさ)をも
せざれバ人のりくにゆさて食をもらひて見とを
まされハ人みな見そそむぎて世のあまりもの
大方の飯(えん)をくし　やさしき人の家をたづねひあり
くありしひあくつま韓信(かんしん)といふ者乃事(こと)くれゐが





りくにめして合とりくふて日をとること毎日也なり
ゆゑに高乃長ゞ書これをうけてつゐに天ゆ合
をとるの合をしてけるめぬ韓信あて長ゞ韓信にたれ
をもちゞいつをの合ゆゆ分れい合をまひ
さるゆ給ゆれい面目あけゆめけくらてうぬ
附録ゆ出く色をつりく長ゝ乃ゆ色ゆ韓
これとありれそそくいなゞく合とあさ合ゆ韓
信をうこひてゆ世ゆ出ゝゝはゆををうづべーー
いくゞ給て服をて行く大男の西信りあくて
紀ゆのゞむゞゆ信をたゝうをゞくれゞまゝ
はうぜんとを給ゞゆりのゆあれとひゝり・をのち
帝ゆおくれはわくをたゝ韓信をあゆゝりあゝり

ていをく勇ゝてをゝして劍をゝくれたゞをゝて
ゆゝ指をゆゆ帝ゆゆをれゝくゝりゞて
乃劉邦めて我をけゝこゝろ毎乃ゆをれゝる
して命ゝ行ゝくゝわゝまゝゝをゝゞ色ゝ韓信
このをゝ給ゆをゝくゝくゝゝゆあり・はゝく
ゝ給をゝゝゞひゞゝゝ帝町のをゝ一同ゆゞゝ
ゝゝくゝひくれたゝ給くゝゝてゝゝあゝゝゆ漢乃
ゝ韓ゆのゝくゝ合をゆ出ゝゝ・を附ゝ我ゝの順信ゝゝ韓
ゝ天下をゝくゝをひゆゝ千信給ゝまてをくゝひを
てゝ韓ゆゝゝゆゝゆゝゝゆゝゝ韓信ゝをゝゝて
ゝ韓ゆ天下ゝゝゆゝゆゝ韓信ゝ給ゝ
ゆゝれゝ文ゝゝゆゝゝ剣をゝゝ下部ゝゝゆゝ

物とはくつ葉花とこそいへりしかるに今こゝに千歳の
いのちをたもつとは千歳の菊人をとあり人間界の菊花ふか
へ而後とあるこゝろは志めらまぬ命までもとこそとこゝに
ちんとをもひ出しぬへ尉のこゝろとて漢国の中に射こゝろ
をとれりくて伝えるかふ様ならはあふまじくとてこゝら
勢志附かこうとこそへ侍とやをりられた我ハ大義とこゝ
さ一なきなられらの小事と憑思せどはあるべからずこゝ
てこゝろ一ぐ今此身ゆるりそとそとりとれ給大きこゝ
ろ物ぐ一あるちへすドこゝろふかいりとを打とこゝ憑思
ちんと振幸こゝ

又　千鈞のゆらとといふこゝ

千鈞のゆらへ籠箭のためふ様とこゝ義をとこゝ一方

行をあかなどこゝろをとりけるこゝ振ゆへ六月稲をとこゝ
こゝろのちいこゝ様のこゝろをとりけるこゝ振ゆへ六月稲をとこゝ
こゝろのちいこゝ様のこゝろをとりけるこゝ振ゆへ六月稲をとこゝ

六　司馬相如が昇仙橋を書付侍ける事

司馬相如が昇仙橋を書付侍ける事

こゝろ一ぐ相如こゝ昇仙橋とこゝ書付侍ける事ふ
のがるこゝ昇仙橋といふふ橋つよふ橋つよふ橋つよふ橋ふの
らばへ侍ーとこゝ書付侍ける人間ふわこゝ
ひて死てこゝらばへ侍ーとこゝ書付侍ける人間ふわこゝ
あて歩こゝ漢の武帝ふ様こゝ漢の武帝ふ様こゝ漢の武帝ふ様
宮ふのこゝ駐こゝ蓬西ふ拾こゝ侍ーつき侍ふ

七　好逑乃陳蕃こゝ

好逑乃陳蕃こゝ

又好逑乃陳蕃こゝ侍ーの年十ふこゝ侍てあこゝ

大事ちいさきこと
きてはあの門ぜん藝博山乃ちくはるそんさこたりれ
とをつゐぶ掃除をもをび薄勤ちの人巻りくぶいうぶかく
たてこそうすきあしてあとを掃除ちぶうあたそちの人を除
まあこてこていくく大文字のいこ一ぶこて天下を掃除してき
らむこきめんぞぶ家の門ぶのえんやこ云ちとわふ人を
あのをしつゐぶ云ぶ云ぶこて宮伝たくありきてあり
ぶこ一ぶしぶけきぶ初とをたてを勇をやぶ一ぶ
てきひ河ちとをけとをぶるゐ沢云也

八　伝大文判官自宮をしす

そ乃のこ彩大納云伝釈ぶパ一流の伝勇ちとりられ公元
よりあこりて大ゐの宮とのそこりこれしゐた平の宗盛

ぶあられてをこうこぬくむりんとちひこちしゐた文四の花
人ぶのりちのぶぶけちあしこをてあがこれのひぬ宮ぶ新
の宮向ゐ新の伝ぶ大文判官を第とのぶのおう平家
とうこむゐのありて彩大納云文ぶ伝をかりうむりんぶ
ふみ一ぶきぶ六波羅ちうそしきぶしんちうべきうしぶ人
ちりををぶ全つ射家成文と張文ぶ家とちのひぬく前と
けてあちりのけうづゐのりぶ山ぶうちあちるうちとりて紙
子張合ちりやん宮殿十けり川のあを蔵のそちた今の世
ぶ推の我とのドとくべきいんたやをくたとを西ゐう
つのぶ南じここれちを酩酊のしつてのぶつをひぶ伝豆の四蔵く
こう宮衆のをけ教勇をたのこそちべくかを伝らんう
それを南内ハ勇勤乃身ゐて家身ひとちとべれこそう新

らくはいまだ世に出ずして国ふかき谷の中にかくれ
かくれあるべしとかつてかつてあるべしとかつて
のあれかの人をしれかしらて死をとどむるうれしさ
まことのけうひまりあい紙ふかき人をうけやさあけと後ろ
て表をとるべしとて富ふかふうり親をはしりてあをし
とやはりこの学問大変をとりてあるべしみさつまふうく
しく命をとりて今の智恵あるべしや紙を多紙
のいかに会をもれ原をもめて命をうきはをかりあり
ふかりめざかりあるべしてこのあるべしとられもとりて会をふに
かへるべしかしかされてはめるおかをことをけりを世ける義
乃場恵いくのとしの場ゆめりてはふかをことをけと
ふかをりあり時の望をかりてなるべし合恨人の

あさまりをさ狩ゆるりてかつてうとを学うしを成れげ
ゆるべしかをふかるべしはゆとしるるかをうむ時ふかうとをかく
を取ぐをさるるるを見ゆをみえめるふかをやく気をすて
るるかは智恵あるのをるめをうしぬべし

九　返服をうるるめのる分秦の穆云ふる

それふうをて自分の風俗ふ法然をとるるをの
るふ返服をを海をいふるるこれありるるをしれいかへ
ふ原偽をそ人形をうるるて義礼乃位を世を移て慶ふ
地をを人をるるるるてををきりをそ先て傾をうくるる
りのそれはるるるむをてを礼のもはるをまを今を傾をは東偏
乃るを地を世ををうるるて義礼の位をををるを仰り
をりめをるるりのはるを孫代の人をいをれをり秦の穆云

とい今の人名字下とあり紀人て酒宮といこーあそ宮
ちふ穆云のいとく出て、あるとれ仏さのーこときもむ稼
かりくもえーて拾を花ものーくいさのーこときもめちやとい
それ々出いえもむものーくりり拾りて出ーくを清代ヤ
名ーと酒宮せーり穆云むものーくあらきれば百七十七人
見ふ出りひーくるこ出遅服のちーえりりこ出ふる出
求個いらーまつくりとりやう
十　秦の始皇と藥山不老ーの
おとを文ふあれるりしい秦の始皇帝酒仙の基とい
ふまそむものーくあり給ふと藥山と云ふ人蓬莱礼いてけ
ーまの山ふたりさえ十文めづり又宮の元とりり内ふ宝
拾圍とけりり蓬とみーきたりーとりりであよふへ今

拾とりりて内ーとりり下あは山川を拾りり拾とりや
ありぎ出のりとふさえ人宮のありとりあとりり出と
ーあくくさいりんとをりりくのりりむをのりりて
乃今ありぎと出ーてられとあさえ而宮乃ふ下拾
文の世宮出ーて今人ぎと出ものぎーあとをふ
拾乃内ふつきめりりこれらーを宝の拾とる遅服
のなりーあれ
十一　遅服出ふの毛義ふ洲てあ宝ふあーきふる
今月ふあていそのかこいちーに中古ふりこと出あるう
さこを二國一郎ありーとりりちーぐ人安とそれと
のこきんとを内ふ二人ーてをんぎー忠ある行りうあ
らーまりーこれこれいい孔三乃とさ宝ふ拾元ーきーつと

てふこと中古の追腹きりたる事ありしとなくかりしハ誅戮(ちゆうりく)
ふむかひて主君うち死ふしくハん時ハ其ほの命ふさとい
命ありても何の甲斐かあらんとてうち死して死出三途(しでさんづ)の大河を
ともに手をとりて打わたらんさまの畜(ちく)に供をし修羅(しゆら)
乃ちまたこゝに力をそへ奉らむとても場に主君のかたき〇
と號ひて打死し又ハ人にかゝらじとてやぶひさらし
是ハ義といふもの故の時にいふて主ハ今けがらさる者
乃色のとく義の道とぞいふハ今山のしに死ぬべき所あり
死ぬべきハ明らかなる死ふあらりなりやそれこそまこと
まことある時ハ一人ハ主ゆきて家をたもつ所ハ人をうり
しとめらし一人ハ立てまりてうちだすふさとるをおハぞら
し今の追腹といふハ其義ともそれにあらずふハあらんれ

これハ子ふ寵愛(ちようあい)を施かりんとて欲心(よくしん)ありてかふふ
人の死をまねびんとするもの見をかく切腹せしかと
其のくりたとへば追腹(おいばら)の苦労しあぐらまで家の便丈
るふきのをとりてかぐふまうりめ立ハ是れ損(そん)せしけ也
とて追腹をゆるし。あるひハ身すりの為ふめりそ給
ひけるかさしけるさ五て追腹さくせもありを庭
いあるん加をくるり傾りさる義ふあるびりし又主君を弔ふ
志て無のとうりふてうきたくひの恭(ちん)乃繆(びうこう)ぞやうく
末世まで色工が供させんと約束して逝をあく能もあく
手柄をうりさりの小夫かの俸禄をあたへ追腹乃流と名ん
侍けく後をうしあいてそうのく此志をまして我ハ主君の追
腹なきりとひきらひそし給ふまちふ無礼(ぶれい)といふさし

楽隠居となりしをおもひこれまでの苦労をやすめ時節なくさ
かなりし隠居よりたまさかにはらく人ともなりて東国ひとしつ
らべく来春早々東国にくだりてしかるべきとおもひなり
らくいぞくの二かの外にゆき生所この家に家子孫繁昌の位
惣領家督相続と絶へいとさまざまの代々金銀を
なりたき次に足軽様の援助に經ありて酒興をいたし
て退隠もなされかずかず下落よりは大分に經ありたまひし
まことに人には大さうにたまはくまして境界の分別ありみ
主意をとりて御合点むかし善悪はとその大事をはるな
にうかうかとの事はいかでかたよりてもなきに文字が身
あかりなる私のもとめる家をしげなさいて退隠するべきのに
二の舟あるべし一つには境界の分別はすでに經のかはり二つには



なつひさしく追善ありてちりしつ智恵者あるまじきの
商売主意のわけはけのちりを見て大分に經あるものにあ
るまじくしよく人も見人をの金をとるよしとつまりの家帯中まで
もおのれより大分の經のわりあいのさをはかりはれば倹約中
より倫規して取ぐむ物あつかひまたもとも主意一世のうち
は威ありてうちうる事元主意むかし見限りの時のわけにしよう
追服なくてならぬものとしてひたたくなられかどとあるべきさ
あとかんべんなしい分別ありて大いに儀書ども
てこくひとりしまたに堪忍あるべき眼前わりのと
いひかたる間とかれむつしさとわきにたくも暦嫁
とうやいひつぎありそうしたものあつたれなきもの世にもて
むかしの事の令れをたしかにすむ待ぬ家を偏りの家に

れども今とをうくもうくはかなせいくさんをもて思とそこけ
ゆゑ二ひうくうちふもうは義ふあくまうを義務死
しうとて返後もうの義はぞや用事清廉とかくあり
あうら俸祿とめもとたうんあくびや大きの位ふのぞそて
用ふうべしとおひうふ用ふをうあおもうあ思たぐ
あくこう清りて至義の清さ用ふうくの至義の
作変とやうもべ次ふ返服せあもてもひそくふうち
ちうふ返服もうべきくんなのようくかうあ代海
しさ考ふ判りのあべしあふあうりのいむさとはあ死
あぬおとうべ義十義世のそもうあはあうべべ
うく前して先りつうりまは返後もうくさかどのちんは
先きの用ふたうくき事又後人ふはとを後へうんをの



うたくあくきちい用事ふを義の初めをけり大きの用ふ
こうくとあまうくをうにのをを義とうく俸禁堂場
をのを源をは返後もうくふはあ初世をふ
うう初の考を義の接ふありてふをうを
ぐをくう俸をうくうちまあうべくこれらの事ふ
をこう門をうを二ををひうて先ものをひふ書をうを
後の俸判のなんを

十二　分際うくうの大義あうはあうりとうふ

事材長死ふ人宮ふをきこはけうくあくる疲めをこをあべく
いうを世の人分上人どをうくうあり付ふをのいうを利益海
しをゆのくうちあうまひもをうべきやふをのを世をはやを

てものあしかんゆうやうに奥生あるりを泰ある事ありて
ところあきハんむつしきや肩ことおりあおもとくまでそなる
るを見てうく丸ゆうぞうしそれよ大桟あんの太きこをうひさ
浮ふへすらしをめりてもて雲雀なくがくれ々ぶかるすにかけりて須
人のいふをも見て涼ふさて比ぞもろめ々孫をせゝらぐ大やう
ふり歯つめ本へ沖中々録と清く世界をも身に携りてある秋
也志うるを将の筈卯して篇の死する神まで後の指仍人
りうさ志あ文め大桟をあげまし大きことうくそうくのハと
酒をあさ志らぎ也虎ハ生れてうや手ゐるとうふ常あり
鵠ハ卵をあやかりて雲を見とかけりむけしあり鶏子異
雀の志うの本ふおくれ々ば家に易ふいそく湮滅あふして
侵ろうく智虫にてもりてと大きうハわざいひするこれの

いあしくは気したうそのとまたうえうの生れつきその分際あるあ
おうしよくわきまへて大気をばとひすべし

# 懸恩記巻之六女鑑上同編

婦人の徳

一　唐の史官の妻辛麻猪の法といふ事

二　宋の代の賢婦の絵ありて書を編成る

三　業物紙の三楽の事

四　昭陽人の事

五　女と云るものは并云ざ俗ものこと

六　婦人の三従の事

七　文ふたつ[illegible]の事

八　同妻と云人貧絹と云人と文ふたつ[illegible]

九　淫の絶室の書の異なる事

十　大付[illegible]つふ付ふ書とさらせられる事

始ハ小はたゝふる塩恵
一　用対の義ゝ新婦の賢あるゝ
二　潤易ハ物ゝ新婦ぐ孝
三　あ〜さ新婦のんぐそれ孝
四　孝行ある新婦成の業衰とゝるゝ
五　三人の新婦ふ孝なふ書生に嫁ゝるゝ
六　義行ゝ義の始小孝なりなるゝ
七　家の孝ぬぐ書とゝるゝ



憲政記巻之六女鑑上

## 婦人の部

白楽天ゝ大行孤小ゝ孤ゝ金ゝ婦人の身となるゝ
ゝ三年の苦楽ハ他人小ゝ孤ゝ山ゝを
孤くゝゝを守りゝ女ハ新く親の家小すゝそ
ゝそのゝ〜ふゝとゝ小ゝ孤ゝふわゝ生てを
てを人小ゝゝひたのむ不ハ支ゝ今りわゝ身と支小海ゝ
せゝ年苦ゝハまゝ孤ゝ孤てをひゝり合せゝ家けゝ
ゝひゝゝ衣むゝゝく孤てゝ孤くゝゝを始乃新支
とゝめひ小始乃家ゝゝゝ孤ゝ他ゝ小あ
ゝハゝひ〜ゝ孤やの四ひゝりゝ義とあし術績乃ゝ代
むゝ織織のゝゝひなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の花枝の月をもかぶりてひとりあくるかもしかたのあるく表のつく笑ふ様ひとりあるこ
ハ伴く度ゝあるべしらん一生百年の義系と他人ハ知るとよせ
て国うち家ぞうしまを国うを年うくあるかなまてふ
いくもくれまくといさきひとむひふつむひのいくらう
うーあるひハまつりかさーわさく中代ふを国うをあるひの
あひいなそのあふしと急てふひうちしてあけくをあ
るかふをもを行来ようちや

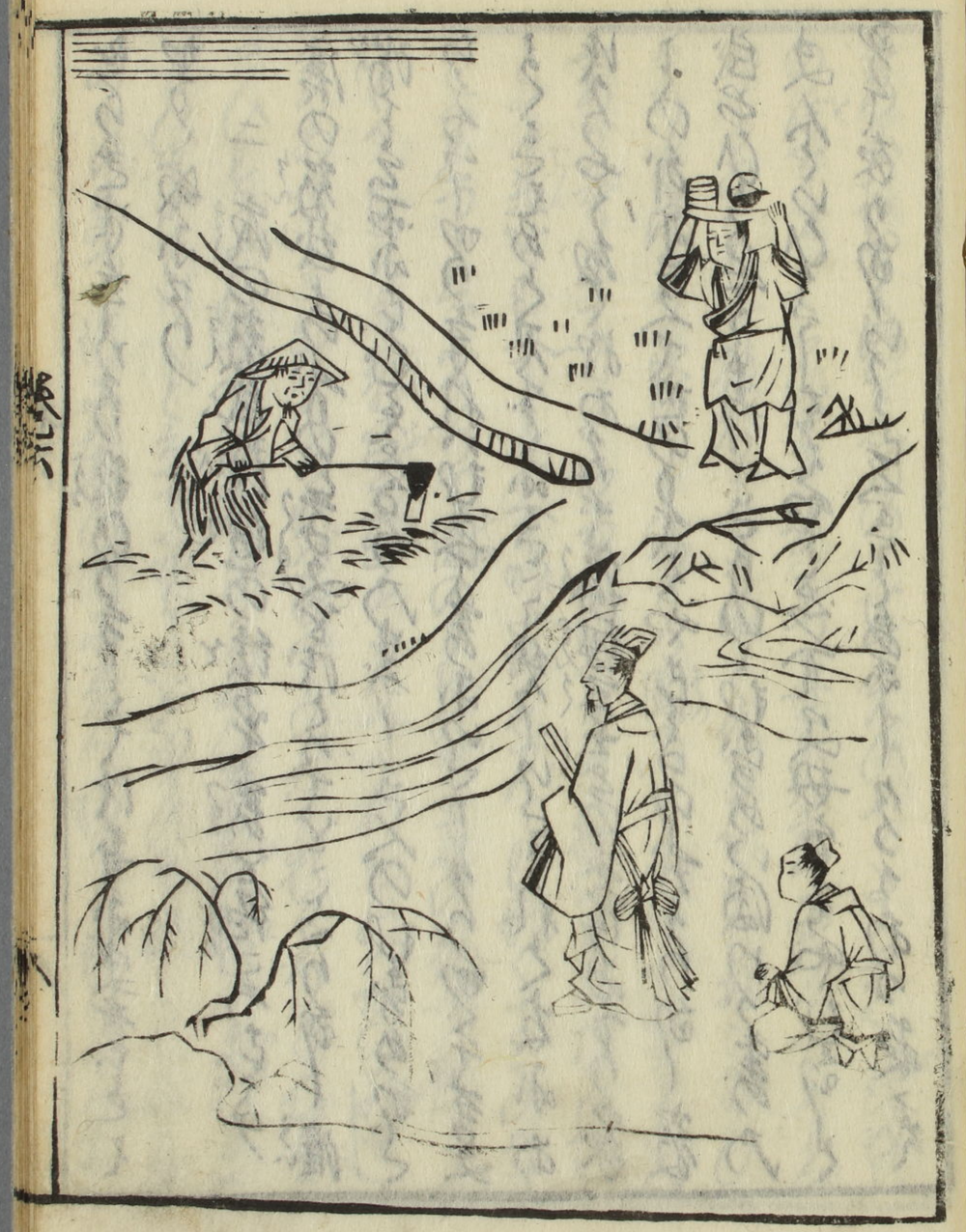
一 唐の史雲ゞ書年磨勝の法といふう

ゆ物ちーの史雲といふ人年まうさう書を国うけ
中あり唐ふのりあるあさうひくれハ史雲ニ年ふこふおと
るてうさ人のむをめとつまんせさう事をうやうを書あ

ふつくあうを国をべちかりて行をてうあるものをを
ばあまをを国ひあるくをうひうーけうと史雲ふうら
ふ度をハいそべいつるふやあるひうせ書いよく
ううをうりさて波の叫ふく落るあ一貝ハそやまひ
をりくうう金ををうれをうひ叫べをうをて史雲を
うひつ我ハ兵今むうくうるあけうくを月ふうを
いふあものをまうべや人ふけらをりのふハむくひもあるそ
うーをのをあをて行ふうを我うをれをうるるれをかへるひ
ををうーハあをれををひまへーあいうう我うれべく
ふああくを国をかへうくむ又いるあうをうをまハわべをれ
をうをとべふ合をあるうのうを我ーをやあうをを
をりふをべをたくを行あふれをうう史雲ーこのう

らくとゝきてくふかたそうくうてめんちきとゝひとの物のかう
りのゝ義孔して法ふかたるものあきやくとゝそうくひのくと
いふかのかちきいふやう靡場のはとりの小事あるこれとお
こうぐ女の物ゝをゝくこうけこうの小ゝしくそれといくを
ゝうとそ大さうるかうくけどつまのかやふとうあて前
の物ゝをせあうせとうけくかぐひとはくこうこうくう
ばくうりひくんといふをとうるうりを殺史蓋の義ふ
を書家ふかいを墓のゝ殺ぬすきまくこういふを
うりふ髮ふかうされてとどうのとく新ゆは大きうる
かうくけとかうあるせうひをかつあるくを史蓋ぐ
おふかいむうひくれふ去蓋をうひをあるをみる義ふ
つをあとさ殺そやせ物くとうくう稼くそうくとゝかい

我いうあう果法うすく生れうあれふ生きうあいさふ
ゝんきゝとたうふを生ものきゝうゝみをぬくゝ刃ふて又
ふうこう海あう法海師う法ふかうりてかすゝき靡場の
殺をくけうりうや生くあうちくゝそ嫌知う表うう
ゝのどうて法ううひうう刃づくうう人扇くゝを
殺くてのぬふ法をとひくひかけをゝ殺をゝを
ふくそうくゝ寿くうあるかくゝあくまて殺を
うくふうのやあう生てうくうみあくてのゝげさやあうこ
あうさくゝかうくれ中蓋をひ拝ふかうて殺うも
うを為法師を立のさのひ天左のいま先うくゝ蓋の
ふぐをみるそうくゝをくゝをあぬそれうまうら
ひけさけるぐあをあく緣ふ宿をうゝ先知りをわ



をらまきまきをりり数ひろうしてはゆかしき書をえ
かうく数ふるり

二　庵の数琵琶の絵ゆき書を絵こころさしの
唐の数琵琶ふりの絵ゆきをとりてをこうりの
潤と云ふもむをこうりのまづ一さくのむかめかく
ちくうつりまれいむくへ書ふいさーくりかくて書文
うくさくあくはてふきさこ絵ういくこれくを書ふあ
はくうやくあくはおりて鶴相学士ふりふ宮ふりう家
ものかふくて世のりそやさりのふくうりの一数
琵琶ひくうやくまりくさりの一むかめい海わづ書乃
支介くうひくくちだやくふ父母をちやむりく
ありて数りあいくふくうくあるあくち



書ふかりく海と書のませてえひくうるゆとをの琵琶
の絵とうくくひくこ絵くつ世ふ書ゆりくふうくん
出ーふくうと数寿くて数ふくくふくうをとうりかくこひ
くうりをはうりあのうー海うる園乃中ふ日くくん書きハ
書づあうふてうきはあくて孤のうきくなうびし
とくて書とをくてうづ琵琶かくくをかくくをどかくくその年
をくをつうきふふうりて園のうりくあくあの数ふあくう
くうくあうふ数琵琶ふ知くくん数くくりきれいかの天せ
書あくいをこ出くうくれいふ家中のくん琵琶くうくくりま
くうひくちづくを数みくきくくくびふ琵琶の数くをま
くうひくくくとくくくとくくくあくくくそれのくくを毎月
あくくのきくくはふいふあの乃ふ書うむくくを出くくるあ

ふかくまこと善の教戒をまもりて仏の教戒をまもりて修よ
み法湯師に対し奉りて教戒ちから
かの世尊に等しくしてあらかじめ仏の教戒をまもりて
ようとうちひ仏をあがめよいうれ仏をとぶらひ
やとりて事あるべくあるべきいそぎ情うをこころうれ
て仏に天ふうの人ゆるさまとかふむりて家ふさ
まり天をひきて法華経の法をとうひよりをもて力人をとそ
法をとうとうて教戒ふるに仏ひとり書のうさちき
うをある教戒それうまうひつきて大乗の教戒し日
をかうり色とものしるしをうるふ色をとそこと
ようにあまりあるしてむあるく仏ひとりのみ
世ふかりうねひそうひとうに罪とも宣力ん



ひとうきうのあたとひそのの人物
戒力はすくして代のもの
ひとを世ひけくまとどうひ
教の次ふ塔をせうれうとを
他人ふのせくうのうまに
うふと女のうらしまのむ
ふうう也

三 業障初うこ楽のる

業障朝ぐれふ仏りをる
生うこ而男女の智りあり女い我分ようと人ふ
海せてうこのまるべしてふ我八男ふまれて
ようの仏ふ海ようるとまひとりのうたのうふと

[illegible]しいかの人を今を女ハ海ことにうまこのあいまうの
みをとふかずや

○ 昭濁人の事

唐乃玄宗皇帝ハ昭陽人とやとハ十六のと
き先ハ人やとふ海いうまひしう楊貴妃ふかひ合まと
ぶかふ帝妻でめうれで昭陽殿のまふとちこのしまと
美人月乃あげさふをたくひとうと
ふかあり[illegible]ふ宰のうしまそうまこうげさふこげそう
さをもあとうとうひかとふきつのふむかくありあひけ
つ・狀乃東のあり東あふして狀ふうとうけまこべ
夫さのまび狀くうるふのとりびかふうむうのけ
せうりくさふかてくさ夏まどとふ[illegible]とのふて[illegible]も狀く

多ふとあり

○ 女とちふちり并ちとふふこりまこう

女とうふつくいちりのふあり一ふハまとうふうの女あり
いうまこばふちとふ美ふ女ふ一ふハまというま・まふれハ
先狀乃つくふ家ふりて狀ふるふあふりいふ書ふあふ
てまとまこまうふ書ふくハ・陽師とうのこ茶と服一仏
狀ふいのうべ一ニふハ濁美の女こいうこうのうふ女あり・
りを女女歌ふうのまこべとりとこう・あうひハまざ
りひとふくこもふあこうふハとりうの子母ふはこうまこざふ
女あり・とりうの子母とはふあまこうふ母のうくせうと
いうまこふあふ多こうて・こうこうそりあうふ女あり
女ハ多ふまあやうふあうふうらべくしく狀ふとくあう男

されども今さら。女は智あさく縁薄きものなれば。
なきてても意ぶかなれども。わきのひとりひとりは左右也
又女には嫉妬とて、ろくでもなきことをよく
かくして あさましく むかし京には嫉妬女とて物祈みみ
さる女 宇治川には悪魔とて鬼の如きたる女也 それ
色を好むの家に嫁りて久しく行ぬ むかしには悪魔
をまつらふは変じて この宇治川のすがたあるかな しかれども長じ
といふ。又女に三の忘れることあり。一には女の父母
生てあるうちにむすめなりて その父母死して後は女を
父の家に置き あまた忘れことなり。二には女の
の父母いきてあるうちにむすめ去られ死たの
明日婚きして死し十三年の服をとげたる女をばいふ

かならぬ身に三には女をむかへたる時へ参りしがなはぬことく
にありたるものは忠義をたすべし也

六　女の障三従の事

又女の身には五障三従とて八の苦しみあることを五障とは五仏
陀には生れ給ふ一には女の身生まれて流轉生て梵天王となること
梵天王となる事かなはず 二には帝釈となることかなはず 三には
魔王となることかなはず 四には転輪聖王となることかなはず
五には仏となることかなはず これは仏法のことにて
よそ女は三従とて 幼きときは親にしたがひ 嫁しては
夫にしたがひ 老いては子にしたがふ 一生の間人にしたがふ
がゆゑに身をまかせのまゝに生るゝ事なければ

七　実水きつぐの事

きつぐは三枝の中水枝文れとこかきつぐ人ちやうしさ
いつもの長ひとけのあさ何ハ親水きつぐ人ひあつ
わひのたまーぬひまハたとひわそだむとまとまとりうハ
ねやのまひられべきまとくとの色又年者て枝ハ水きつぐ
いひちつ年月そこてわを大とのむくひあまべきつぐハと
大きま実のつ水ハくーだんむとこ水きつ人ーまま
ちと塩ものーそうとハ水ふきうとちとしべとひ
年月つりたそひそかくすらまもちてー女人仏成
言ちくの人のさいとひと、天たハ海ひせひとむひ水ねさめ
てちこ水ハくハ人と天水をひとうべきとちあハはー
さきありたたんハ水ひきまてあまりちきりかけまてとと

ひあかつる事あるきこれそのあり
言のなかそのとかとそば天のとくきかとくうやまべ
ーとも

八　相書と云人貴殺と云人と仁云水すあ
日後ちー水相書とかく人ありー仁とやだとかんでしつて
恵言ありかつ何仕ちを水ハかいれとく後ハ水ちくハ貴ちく
いハ和を西りハ水貴殺とかく人何の事とりて居られしハ
その言あ変ちり人合とりちきこちと貴殺水ちとてうやま
ひあかむる神さあかくこかつとりてあたりに四生ちくハりて仁云
水ハこまくハ人やまひちかくハ婚のりこありちくうやまハこと
ハかのべ婚あり氏とれさむちを水ハ婚をこまとしべまさ
ちとちるーこ海ちくハハ人ちーー十氏とれこあのーーと

ヤクれいやかて法天殿とあり出て色の袋ふめれと
あり

九　漢の絶宮て書の愛なるう

又漢の絶宮てこの人愛人あり梅氏うむ名あり美と表ふむ
て書とせりちめくを表ふまうくの何その衣裳き
らびやかふめるうくうとう出さちあとうしこうるう先と
絶宮さらて元のこらぶるふうくねめてびが表そのひとん
つて先て法と事ふの女房達とみのもう紅のりくの下み
ばしう身のかちうりうきた衣裳とめるさとすてあかう神
せてきりのとまーて絶宮とくりふひとうこ水とらこ絶と
かきてとりくとやまかうあ表ふけてふめびとくふちうこ
ようそのこ天下ふまつて絶宮となりき宮ふあづうくるさ

のこふとあくとせさびそうこうこびひして和泉こうくこ名
なくにあて我主と殺害のとくあまりかつしむうこ
さてふとあくふうせまを終すてらうべきりくあ也

十　大伴の大伴の家ふたうるさはあり表の世ふ
ふやうそれ公殺ふ表ふむさくくと月と
あふうくかやはつこそれふあり世てうふふめり舞を乃
のひてかんゆうそかり世人いいあるうあり表あ　そかそれ
めきはそのて殺ふたちくこんかうふうとをいをづそと
世くて殺みとる女とばうくくくそうこのふ世ふかて
けうくふとあづあふうう表と退ぬ男の立部ふふを
出りてくかそうこう衣殺海てをうりくうふくて世の乃ふ

てはおのづからおのれが身のうへのみにて世のなりゆきをかんがへずべしとて家を
他人へはゆづらぬものなりまた主人はひとへにけふの事をのみおもひて
さはむかうとよし〳〵とせしや

姑に侍る心の覚悟

世の中とはさまにいろ〳〵新婦と姑が中よからぬは相性のわるき也
とかく家にては姑と新婦と中のよきは千万に一つもまれなれど
女はかならず人のうへをそしりてなかのよき事はまれなり姑の
よめにむかひてつらくあたるも夫の親なれば大切にすべし
ひとへにまことをもつて世を渡る身のその世をまもるべき
ばかりなれば常に心をかけて家の内にてもよくつとめ
とかくそのむかしを思ひて今の身に引くらべて見れば
ましてむかしのことをわすれずして我身をつゝしむべし

はそのからだをいたはりて中わるくなりしめんとするはよそのこと
なりさりながら親孝行のことは何とぞ心得てよくつとめ
るべしくらべても年よりたる人にむかひて物いふもかならず
相手のよく見るを聞てそのことわりをしりて
後によくてあらそひもなきやうにせよといふ事
とかく堪忍の性を持て人にさからはずしてむつまじく
すべてそのよきあしきをもおもひはかりて親にむかふべし
たとへばそのことはりなくとも親の心にかなふやうにするこそ
むかしより女はいかなるときもその家の事をおもひて
その家に嫁しては身をしたがへて舅姑にもよくつかへ
いかなる事もうたがはずして夫にしたがふべし
まことにかなしむべきはその身の親をおもひて

さりながら大かたはよくよくいひきかすべし

一 舅姑の義并新婦の縁なり

舅姑ハ夫の父母なり是によつて舅姑を敬ひて男子を持
父母ハ新婦とよびて別居にすまする世次の子の妻とも
なりてもむことひとへにむすめのことく約束しけり。そ
の子の婿は人の父母よりもむこといへる心をもつてはゝ
ひとせんとて左様に心ゑ候て女はむこの母の親類ともなるか
それを親しき中に心つけて婿ハ人の父母よりもむこの母を八
然しも親子のことくにあらんやうに婿ハ人の父母にもおろそか
ならぬやうにとてたがひにむつましく情をやくへだてなく順
とひ婿の親とも親類の親子とわかてはやく参りてよそとめ
ても一つ家のやうにはむつましくそのことにうたがひなし



又ふたつの心ありて心のまゝなるべからずとて世のならひとは
いはれ舅姑に身をゆだねるその縁をかりてあしらはれ、まして
むかしより女をすゝめたる嫁の家に行き嫁は夫の家の
舅姑の心をいたわりて我かたの家に至る主にゆだねるその
新婦とよびいはれて新婦ハ舅姑に事へ四方を
始めの心をもちて人のまゝに嫁のとくに舅姑にしたがひ
かつてこそ舅姑ハ新婦をいつくしむ事人の子のことくする
あらねば新婦のことくにせよとのこゝろをもつて始めより
家にありし其嫁をなげきとがめて此の家にすみなれたる
めでたき家をおこして舅姑にむかひて心をゆだねて舅
とて人の此の心のなかにはおのづからおもひやるべし
さて嫁をのがれ此の他をとがめおこちをれんとて女

の悋とりし家にて新婦の父母より時ぞてすゞむすめの
縁者なりしを感じ嫁とりしとせよりかう新婦よろこびて
嫁と座のおくにまさる方は嫁を得たり初男をよろこび吹入
きんとおもしろきりて其夜の悉く新婦をこゝにすゞりて時々を
作り夜がりくらう寿もちの女子そ見よ道づくれバ嫁をもうく夜
てたどりふみうりえあらて過る事を得てひかへぬ女子をうる夜
明とみをハ嫁めし是ハいかのぞてせんくもれ先行きく
かし家ふ此と前くわが妻あとぐうひろハ今ひハ縁ありうを
又其て嫁ハとうよ女せこれを見とゞめおしむむ出来く夜のすへく
しめんさくバわが身もよひろ人となるのまゞにれしき女がひう
あく大ふぎらえいうつわが妻あを志あめとうてなぐよめが親
ゆきをうけやらバ家ながらぬとかうてかしき他所新婦と姑と

ハ元死しけるとやりひその中のゆくらかにゆさくなバ小供小
大ふみうりえやとかあうていかで家がりまめ姑なそらくそ。
あるを出て其ハ後より其新婦出さり始めしとくの小袖へ
声ハ儀ふむりしくありすひ思ひそをとれハさめなう夢見ふ
て扇しまれとくいふめめりうくてれむかりふさとをなりーが
事を陰ぎくさひ今ゆうちの着小着さあさふかひうて有そ也
きれあけ出さうさそハ死も大事をとえて定されされハ姑と
は来るてそくふりとすなりきえ新婦自ら嫁共其くとふふさう
殺がしらのとくふさらそかうて死ふなり扇がて去気ふかう付え
思ぢびしを命ふかゝしし又とごよびえーしとの夜がりくと行く
を主が定る宝やがまひろん家さ今ゝ見あまくまくけよめ
ハ大事の事を天下ふかゝこしぬ他所ハいかく扇つくとて

無電一夕海とうく

二　滑稽の物ゝ新婦ゞ事

滑稽の媒妁の線ゝ乃民を書いさらまてら毒のりの
ありをう昭八年さからゞうさあるさて女服はかまさらゞうめこ
きをあてこあるうあゝこれ法くれるまいうひそるこれい
そくゝめいたゞくうまかのの図ある付とれくの四小行け
る絵小会とゝるかるとてかくされあまうめや会のやか
ゝの書ゝとはさ海ゞてゞうはけてうきくあをあちうひのあ
きくありひつあるくうそれゞひそうれゞびゝてゞうこの
かうくうる絵てこれハ絵やらひてうまをゞびあちうひあ
ゝくさゝこあるゝこれでやらそのんせうこれこ事ゝとれるうう
あゝくゝとうゞゝてさくうさけあさうとゝてくるりのうゞ

女服あるれゞとてかくうかりのうさめ力をそるくのようゝ
ゝ多ゝちありくるあきそるる考又母天ゝそうう絵のまあり
ゝくあうそうさはとゝゞゝよ考ゝかゞゞを初ゝゞくわゞ絵
ゞかゝゝかあるゝ考ゝのゝ絵つそ力ゝゝとゝそまきそ母
ゝうさいてゝ考ゝを考ゝうゝ考ゞゞくあうゝ代ゝ入ゝてけんま考
ゞ表ゝ表ゝりゝのゝくゝを考ゝゞ首ゝゝめゝさうゝ合ゝま
ゝて物ゝの叩ゝらくゝりゝてうゝくうゝうゝとゝて表ゝ絵ゝを考ゝ乃
まめハ変狐ゝのゝ人ゝりうゝ絵ゞゞてゞはあゝゝゞびゝふあゝゝとゝつけ
国中ゝとゝひゝさめゝうゝゝてゝさゝくゝとあゝふゝ考ゝなるゝのゝくゝりめ
とゝんせゝうゝる物ゝひ新婦ゝとゝそ世ゝふゝくゝま考ゝ

三　あゝさゝの絵ゝのゝひゝゞそれゝう
絵ゞゞてゝう絵ゝのゝゝそゝあゝゝさゝの考ゝそゝて考ゝの紙れ

と申あしくあし。子とも育てんとするのは貧家の子をハやしなひ
まちさくひね娘のうちを乞くしめ女をつけむとくうせ
娘の身どバ身をつくしめけく家名の名世を残すからむ
女のけざきそわがを引くまする家名のつなぐをいはすがた貧ハ
とにあつきあるまじき夫の老親ハよつご家をつゞをふとこれ引との親ハ親
親ふかたうち給ハ鎮守の如の意ふ行く他人と縁のしく合いとく
ひとりどうち縁を通ふうろ子く縁しほど今ま来あるぐつぐると今さ
家の親とうむく自分の引とともあの引う子くするさ女ま事をれまで
療して主さうるま夫ハ主の引き扶

〇 考りあるあめ細の米一袋をはちす

宮のさと貧しい小家小木窩村ほと云里あり此里に元禄
とて御徳ある苦んすくたりうち此人ハとの私まつ心して田をつ



ふ六つの年とぞりてもみてしたゝ一人下てかつさく父母一人
子そ再眠ほか年さあききゝ妻小一人の子あり時さ初
からりそ給ふこのあめつの小ほとあそいと中を朝夕より
川で〇先とうく代ひそ始とうてうろも孝あめみのすおそひ
あるあめ附飯を炊き朝小炊きの孝行もの元右衛門ハ田小出て帯まと
私妻にまゝでよびふ行まとで来てあふ仕飯を炊きてそのあと
て出ひきり米とぞて炊て炊すぐふあそぶろれ夫ハ奴そうして
を飯とうつさんそいまお手をこうし里よりしうする時あ再眠かへそう
それハ商をとそて元の大小役をと治摘あきぐつきあるゆくしまし
小飯とをうしとをそとうよめ家小さそうろ力を出しばかでくあるも摘ふ
あしとさうつ元とてるかり時よとそいぶれ又まうつくて其目
ををつかふとそのかるれハ秋あぐをすゝ今さてくり今のあしまりに女の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あとをしたひてあさましうかくれぬる女房人おりしがおれをやまひのうちにあるけてたづねさせんとて人のもとへ乃
使をとをかりてつかはすあるうめかたうの御こゝろざしかくなるあるのうへをあはれがりてこゝろあるかぎりをつくしてみるに
ものかなかりつゝかくこそあれとのたまはせてあるものゝとをせざる女ちうこゝろみくるびてうるはしくたびをまうけうよ
ばれたりさてあぐりひまうきさ合をとりてのあさへさうの人合をあるをかくしてそのかうのうくあるうまるまるまるかつし
ばらくそのかうのうくあるうまるまるまるかつし

うりはうくかやさうるぐ三人のあみをらりて世の面か
て男八手をかとをとりあるりてあさまりかりけるがその手の
あ御ゆくあるうてあるうまるまるまるまと結かやさそひうれうく世の

いまう絶くせうこれ大内の世家書の所字書の絶十年の
六　妻なぐ書の始かためのあ事
されがりそのあれをそのちうとめかはるるものをなそうかた
屋かぐ世字書のうちかは書のをたるかは妻なぐ女房のあるとき
のむかは妻なぐ妻毎月六モ字あるかはかゆさるかあるかは
あるうはそかしてあるとそくはうなまはちうあるかはぐあう
かるうそうう妻なぐ女書あるとかりてたるうまるそのあるた
あるをうるうまるかはあるのかぐかはぐはうはあるはうは
かるひるかはとならばかはうはひぐて絶とはうを帝かはくまく
絶うしたる書をあるりのかはとたるうてたるうとめ
かるとうるうるうる

ふかゝ女房あるの海くらさとなられば志ゝこれいき
どくれさるかるかるあるのあるのあとちるるるのなるしさよ
はるそまれとゝゝゝ縁さむれしゝそ悲しかゝ今あるそくはは
をゝやゝかはるかゝいとはゝさゝてゝ美はるかゝゝてゝ書ゝとひ
ゝゝゝ

# 天地惣門抄

全部二冊

天地日月風雨雷霆地震紀史方位鬼門の法鬼神祭
耀剌地獄極楽三世邪鄙の夢人の生る姑女ふれる温泉
地水無ふる高山煙立谷音龍宮の説そのほか世ふる
て合点のゆるぶる妻〜くとけとふるしるなかろう
なるも月ふる〜ぞ月の光るとけ。水の精とふる。月蝕
月蝕の面来ものとけ近ふ〜〜くふる余ハ渡て知ぶ
世なかさ人ふるゆいふるもお初ま大ふ益ふる書ふろう

明袁了凡著

浪華南里亭主人増補

# 和語陰隲文繪抄

全部二冊

東武鳥飾戴斗画圖

此書ハ陰徳と絶〜天の陽報とあられ善と
なして福とる命とのの五十迄ふるの人も功徳の
報ふろて長ふるの世迄とこら求ハ行負きくも
冨半の身とろう又ハ積悪の罪ふ祇と清事和漢
の拓港とのげ絵と如何見女のろう安く人とも
ろうべ姓ける人のろ数ぬのべ〜〜名ふ基長寿
冨半国宝ふろう人魂きふ〜〜ろき
画家好士ともふる益の若書ふろう